

新入生を迎えることば

田畑 雅英

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。そして、残念ながらこの場にはご同席
いただけませんが、保証人、ご家族、関係の方々にも、心よりお祝いを申し上げます。

昨年度は新型コロナウイルス感染症によって、本学の授業やキャンパスライフは大きな影響を受けました。今年度もまだ収束は見通せず、安全確保のために、不自由をおかけする場合がありますことと思います。本学としても、皆さんの安全を第一に、できる限りの努力を重ねますので、どうぞ協力をよろしく願いいたします。

実は私もこの4月1日に学長になったばかりで、いわば皆さんと同じ1年生です。何をお話ししようかと迷いましたが、これから皆さんが本学で学び始めるにあたって、基本的な考え方となることを話そうと思います。なお、以下の「ことば」の中で、簡単に「大学」とまとめて述べているのは、大学と短期大学部をあわせてさしてしておりますので、よろしく願いします。

よく大学を卒業して年月の経った方から、「大学時代が人生で一番楽しかった」という言葉を聞きます。私自身、わからなくもありませんし、大学の関係者としてありがたい言葉だとも思います。しかし、実はこれは少し寂しい話だとも思うのです。皆さんの人生は大学や短大が頂点ではなく、そこを卒業した後の人生こそがいわば本当の人生です。卒業後何十年も続く本当の人生の間、過去の数年間だけを「あの頃は楽しかった」と思い続けて生きるのは、やはり寂しいことだと言わざるを得ません。本当に楽しいのは大学を卒業

した後の人生であり、大学での生活はそこを充実させるためにこそあるべきなのだと思います。

それでは、卒業後を真に充実させ、本当の人生を実りあるものにするためには、大学時代に何をすればよいのでしょうか。ここでは、二つのことをお勧めしたいと思います。

第一は、自分の好きなこと、本当に興味があることを深く追究することです。大学で何を学ぼうかと考える時に、卒業後にどういう職業に就きたいかを考え、そこにつながることを学ぼうとするのは当然のことです。その際に、自分が本当は何がしたいかに関わりなく、その時点で脚光を浴びている職業に就こうとする人がいます。しかし、このやり方がよいかどうかは大いに疑問です。なぜなら、現在人気があること、流行していることは、大学を卒業する時にはもうすたれているか、下り坂になっているからです。単に人気があるからというだけで、本当は関心がないことを続けていくのは非常に困難です。では、今は人気がないが、数年後に隆盛するであろう職業を予測して、そこに向けて学ぶというのはどうでしょうか。やはり大いに疑問です。なぜなら、うまく狙いが当たって、卒業時にその仕事もてはやされていたとしても、その数年後には、やはりすたれてしまうからです。皆さんの人生はさらにその先何十年も続いていくのですから、結局は先ほどの場合と同じことになってしまうでしょう。これに対して、自分が本当に好きなことであれば、たとえ人気になかろうが、他の人が見向きもしなかろうが、そのようなことには関わりなく、根気よく続けていけるはずです。ですから、「流行っているから」「皆がするから」という、他人主体の理由ではなく、自分が本当に興味のあることをこそ究めてほしいと思います。

しかし、本当に自分が好きなことは何か、関心があることは何なのかは、実は自分でもなかなかわからないものかもしれません。ここからが第二の点です。「私らしく」「自分らしく」という言葉をしばしば耳にします。確かに、他者から強制されて自分を曲げることなく、のびのびと自己を発現して生きたいという願いは当然のことです。しかし、あまりに「自分らしさ」にこだわりすぎると、自分を、現在の自分のままに閉じ込めてしまうのではないのでしょうか。あえて「関心がない」と思っていることに目を向けてみてはどうでしょうか。そうすれば、これまで自分とは無関係だと思っていたものの中に、思わぬ面白さがあることに気づくはずですよ。それは自分の中にある新しい可能性を広げることにほかなりません。こうした心がけをもって、相模女子大学での時間が「私らしくない」自分との出会いの時間になり、自分の可能性が広がる結果を生むことを願っています。それがきつと、卒業後の皆さんの長い人生を真に充実したものにするはずですよ。

社会起業研究科の新入生の皆さんにも一言申し上げます。私事になりますが、私の父は学問とは全く縁のない人物でした。その父が「一流の傍観者になるより、三流の当事者になれ」とよく言っていたのを覚えています。ですが、どうか皆さんは、「一流の当事者」になって、社会の中で活躍していただきたいと思います。他人事としてではなく、つねに「自分の事」として社会にコミットする意識と知識技術を身につけるよう、研鑽に励んでいただきたいと願っています。

以上をもちまして、新入生を迎えることばとさせていただきます。